孤独からの緩いつながり

桐生発コミュニティカフェ創生の取組
～新しい「居場所」を求めて～

群馬県桐生市　青木　紀夫

はじめに

妻と地元にある、おいしいと評判のカフェ２号店が中心市街地にオープンしたので寄ってみた。驚いたのは珈琲のことよりお客さんのことだった。

お客さんは、赤ちゃんを抱いた若い夫婦、車いすのご婦人、年齢層も若い人から高齢の人まで入れ替わり立ち替わり、何かこの居場所空間を楽しみに来店されている感じだ。

本市の市街地は、人口減少と高齢化から商店街は空き店舗となり日曜祭日でもほとんど人が歩いていない。人々が地域で孤立している感じだ。

私は、なぜカフェに人が集まるのか疑問に思い、同僚の両親がカフェを経営しているため尋ねてみた。

「地元の馴染みのお客さんがいるのは確かだけれど、最近はフェイスブックを見て千葉県からお店に来てくれた方もいるみたい。たまに他のお客さんと地域づくりみたいな話しで盛り上がることもあるよ。でも、お店に来るお客さんは自分の居場所と時間を大事にしているところもあるよ」と教えてくれた。

現在、本市にあるカフェには様々な魅力があり、珈琲がおいしく、そして居場所空間がある。必要以上に個人のプライバシーに立ちいらない。それでもカフェの居心地のいい居場所から新しくはじまる緩やかなつながりの芽を感じた。

馴染みのカフェで話すことで自分を振り返ったり、新しい人の出会いがあったり、緩やかにつながる新しい「居場所」としてのコミュニティカフェの創生の取組について考えたい。

１．孤独死の社会的背景　無縁社会の到来

⑴孤独死の実態

2010 年 1 月に放映された NHK スペシャル「無縁社会～無縁死 3 万 2 千人の衝撃」は大きな社会的反響を巻き起こした。番組では、孤独死を遂げた人々の足跡を追うと同時に、故人宅に遺品整理や清掃を専門に請け負う特殊清掃業者や永代供養の合同墓を建立した NPO 法人の活動などを取り上げ，地縁、血縁などの社会的つながりが弱体化した日本社会の現状を浮き彫りにした。

その 3 万 2 千人の孤独死は、そのほとん

表１　孤立死発生確率と全国推計

		発生率		全国推計
		%	65-69歳	（人）
２日以上（上位推計）	全体	2.95	7.21	26,821.3
	男性	3.62	8.36	16,616.8
	女性	2.24	4.29	10,204.5
４日以上（上位推計）	全体	1.74	4.81	15,603.0
	男性	2.33	5.69	10,621.8
	女性	1.10	2.59	4,981.3
８日以上（上位推計）	全体	0.97	3.15	8,604.9
	男性	1.40	3.90	6,311.7
	女性	0.51	1.26	2,293.1

※発生率は東京都23区における孤立死発生率
※全国推計は全国の65歳以上高齢者の孤立死推計結果
（出典 ニッセイ基礎研究所　2009年東京都23区における孤独死発生率から推計）

どが、国の官報で「行旅死亡人」として名前もなく、わずか数行の遺品・特徴などが記載されただけの人生模様となっている。

孤独死をした人たちは、すべて血縁関係がないわけではない。様々の事情で引き取りを拒まれたケースがほとんどだ。

東京都板橋区高島平は、1970 年代「東洋一の巨大団地」と呼ばれたが、ここ 30 年で地域の人口は３分の２に減り、4 割弱が高齢者となっている。2014 年春、72 歳の男性が自宅で亡くなっているのが発見された。

NHK の取材では、ある男性は、北海道から東京へ出稼ぎに来て、給食センターの仕事をまじめに務め、定年を迎えた。仕事でのつながりの社縁が切れてから、アパートで日常を過ごすことになるが、アパート住民との交流もなく、地域とのつながりもないまま孤独死をしてしまう。

かつての日本人は身内、地域社会、職場の濃密な人のつながりの中で、ともすれば身の不自由さをかこちながらもお互いに支えあって生きていたのに、今や血縁、地縁、社縁に昔日の面影はない。

(2)無縁化する背景

日本社会を無縁化させる一大背景となってきたのが経済・生活上の家族のつながり、役割の変容だ。

家族の変容に関しては、栗原孝氏が家族社会学の論壇サーベイ的な論文で、次のように書いている。明治以来の「伝統家族」は、「家」の観念によって規定された３世代の拡大家族だったが、第２次大戦後の民主化政策や経済成長に並行した職業構造の変化によって、核家族をモデルとする「近代家族」へと移行した。農村地域から都市へと就職移動し、そこで結婚、定着する人が増えた。

表２　日本の世帯数の将来推計（全国推計）2013（平成25）年1月推計

家族類型別一般世帯数及び割合と，平均世帯人員

年次	一般世帯						
	総数	単独	核家族世帯				その他
			総数	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親と子	
	世帯数（1,000世帯）						
1980年	35,824	7,105	21,594	4,460	15,081	2,053	7,124
1985年	37,980	7,895	22,804	5,212	15,189	2,403	7,282
1990年	40,670	9,390	24,218	6,294	15,172	2,753	7,063
1995年	43,900	11,239	25,760	7,619	15,032	3,108	6,901
2000年	46,782	12,911	27,332	8,835	14,919	3,578	6,539
2005年	49,063	14,457	28,394	9,637	14,646	4,112	6,212
2010年	51,842	16,785	29,278	10,269	14,474	4,535	5,779
2015年	52,904	17,637	30,116	10,861	14,274	4,982	5,150
2020年	53,053	18,270	30,189	11,037	13,814	5,338	4,594
2025年	52,439	18,648	29,664	10,973	13,132	5,558	4,127
2030年	51,231	18,718	28,770	10,782	12,340	5,648	3,743
2035年	49,555	18,457	27,678	10,500	11,532	5,645	3,421
	割合（%）						
1980年	100.0	19.8	60.3	12.5	42.1	5.7	19.9
1985年	100.0	20.8	60.0	13.7	40.0	6.3	19.2
1990年	100.0	23.1	59.5	15.5	37.3	6.8	17.4
1995年	100.0	25.6	58.7	17.4	34.2	7.1	15.7
2000年	100.0	27.6	58.4	18.9	31.9	7.6	14.0
2005年	100.0	29.5	57.9	19.6	29.9	8.4	12.7
2010年	100.0	32.4	56.5	19.8	27.9	8.7	11.1
2015年	100.0	33.3	56.9	20.5	27.0	9.4	9.7
2020年	100.0	34.4	56.9	20.8	26.0	10.1	8.7
2025年	100.0	35.6	56.6	20.9	25.0	10.6	7.9
2030年	100.0	36.5	56.2	21.0	24.1	11.0	7.3
2035年	100.0	37.2	55.9	21.2	23.3	11.4	6.9

注：四捨五入のため合計は必ずしも一致しない。

（出典　国立社会保障・人口問題研究所）

1960、70 年代を通じてマイホーム主義が浸透し、専業主婦が増加したもとで、都会に出た若者の世代は親世代とは形態、構成、意識を異とする家族を形づくったのであった。この家庭と職場の性役割分業と豊かな家庭生活への希望がセットになった近代家族が、家族の新しい姿（＝戦後家族モデル）として認知された。だが、70 年代半ばに経済が低成長局面に移ると、一転して家族は、夫の収入の減少、教育やマイホームの費用を補うための妻のパート就労の増加など、厳しい条件の中に置かれるはめになった。既婚者の間で離婚が急増する一方、若い世代では晩婚化、非婚化の傾向が強まり、結果として少子化問題も持ち上がった。（栗原孝（2007）「グ

ローバル化のもとでの日本家族の変容」）

50 歳時点で一度も結婚したことがない割合を示す生涯未婚率は、2010 年で男性が 20.1%、女性が 10.6%で上昇傾向。低賃金の身分も不安定な非正規雇用が増え、多くの若者が将来を見通せず、結婚を先送りしている。

また、国立社会保障・人口問題研究所の日本の世帯数の将来推計（2013(平成 25 年 1 月）全国推計）の公表によると、世帯員は 2019 年度をピークに減少開始。平均世帯人員は減少が続き、「単独」「夫婦のみ」「ひとり親と子」の割合が増加、世帯主の高齢化が進み、65 歳以上の高齢者世帯が増加する。高齢者世帯で増加が著しいのは「単独」と「ひとり親と子」となる。

２．求められる地域のコミュニティカフェ

⑴新しい「つながる場所」の存在

今、無縁社会が広がり続ける中で、人と人とのつながりは、“家族”でなくとも、“会社”でなくとも、“故郷”でなくとも、新しく築いていくことが重要だ。縁をなくして孤立する人たちは増えているが、きっと少し手を伸ばせば「つながり」を結び直すことができる居場所がある。

取材した NHK スペシャル取材班は、次のように述べている。「無縁社会の広がりを食い止めようとしても、時計の針を逆に戻すことはできない。私たちに必要なのは、ひとりで生きていくことが当たり前の時代となった今、無縁社会と向き合っていく覚悟、そして無縁社会を乗り越えていく覚悟ではないか」（NHK スペシャル取材班[編書]（2013）『無縁社会』文春文庫　P339）とスタッフの皆が感じたそうだ。

また、今回取材する中で、NPO のような地域に根ざした取組は各地で始まっており、孤立する高齢者を見守る活動、誰もが気軽に立ち寄れるカフェ（コミュニティカフェ）を設ける活動、お祭りなど、たとえ、ひとつひとつは、とても小さな取組でも地域ごとに、新しい「つながる場所」の存在が、ネットワークで結ばれることで、新たな「地域力」となって無縁社会を乗り越える力を生んでいくと確信したとのことである。

⑵コミュニティカフェの広がり

コミュニティカフェとは、カフェは本来飲食ができる場所。「食」をきっかけとして地域に交流の場を提供してくれるところをコミュニティカフェと呼ぶ。全国コミュニティカフェ・ネットワークを運営する長寿社会文化協会（WBC）では「地域社会の中の「たまり場、居場所」であり、「人と人とがつながることを大事にする、行くとほっとできる場所づくり」を総称すると定義している。

都市化や少子高齢化で血縁、地縁、社縁が希薄となる中で、地域の人々が新たにつながっていく場がほしいという思いからコミュニティカフェは全国に広がっている。

３．コミュニティカフェの現状と実態

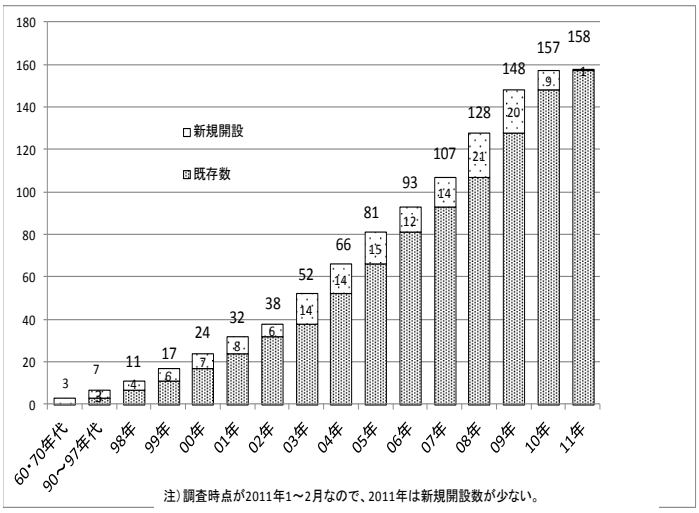
⑴コミュニティカフェの実態に関する調査結果

2011 年 7 月、大分大学福祉科学研究センターが近年、増加しているコミュニティカフェの現状と課題を把握し、今後のあり方について検討していくために調査を実施した。（478 か所　有効回収数：166 か所　有効回収率：34.7%）

近年増えているコミュニティカフェは2000 年以降に開設されたカフェが 9 割を占めている。設置・運営主体は NPO、個人、任意団体で 8～9 割を占め、自治体設置は 1 割未満であり、個人や団体の自発的な設置が多く見られる。

また、開業費、運営費は、大半は補助なしで設置、運営している。4 分の 1 は会費制をとるなど市民の金銭的支援を得ている。また、6 割はボランティアスタッフがいて、人的支援も得ている。

図１　コミュニテイカフェ年別開設推移



（出典　大分大学福祉科学研究センター　コミュニティカフェの実態に関する調査結果）

目的は地域活性化が 7 割、高齢者、子育て支援などの保健福祉が 6 割、両方を目的とするところも 4 割ある。

事業内容は飲食、教室・講座、小物の販売、創作物の展示など多彩で展示スペース、販売スペースをそれぞれ 6 割が設置、飲食では「地産地消」が特徴に挙げられている。

地域との強い関係まちづくり関係機関や利用者グループとそれぞれ 4 割以上が協力関係にあり、他にも福祉関係機関、自治体、趣味等の団体など、9 割が地域の様々な組織団体と連携協力をしいる。

会話を求めてくる一人暮らし高齢者、子連れでのんびりしたい若い母親など、世代を問わず、おしゃべりや情報交換を楽しみにしている利用者が特徴である。

採算状況は、4 割が赤字。補助金を除くと 7 割が赤字。他の事業収入からの補てん、設置者の負担、ボランティアによる運営など、収支をバランスさせるために様々な工夫がなされている。

利用者層の拡大、様々な世代が入りやすい仕掛けづくり、大学や地域の団体との協力連携の強化、事業への理解と認知などが課題とされている。特にスタッフについて、ボランティアの確保、専従者の雇用、マネジメントのできる人材の確保、若返りや後継者の育成などが課題となっている。また、財務面では、売り上げの増加、参加者の増加、人件費や家賃の引き下げ、補助金の活用など赤字の解消につながる取り組みが課題となっている。

今後、コミュニティカフェについての認知を向上させ、助成金や協力団体、スタッフの確保や建物の改修などに関して、情報提供、助言を行い、運営についての研修等を行う中間支援も求められる。

４．全国に広がるコミュニティカフェの事例

全国のコミュニティカフェは、2010 年の NPO アコースティックギターローカルネットワークの調査によると 1,133 か所が運営している。

今回、取り上げる事例は、地域の社会資源（食材、大学、寺など）、地域で生活する人々の状況（子育て、単身高齢者、障がい者など）をとらえ、経営が厳しい中で、人々の居場所づくりを大切に運営しているコミュニティカフェを紹介する。

(1)大学連携から生まれたコミュニティカフェ「ソノツギ」（栃木県宇都宮市）

宇都宮大学正門近くに位置するコミュニティカフェ「ソノツギ」は、「とちぎ市民まちづくり研究所」(陣内雄次宇都宮大教授主宰)が「地域の人と人のつながりを紡ぎなおし、まちを育て、市民を育てる場づくり」のために立ち上げられた。

写真１　ソノツギ

（出典　ソノツギHP）

コンセプトは「地域の縁側づくり」、もうひとつは「LOHAS」、つまり環境と健康に配慮した持続可能なライフスタイルの提案と実践である。

「ソノツギ」のカフェ事業はボランティア活動ではなく、出店者は家賃、光熱費や上下水道代の支払い、食材の購入、備品の補充、それら諸々の経費を差し引いて初めて残金、つまり利益を得ることができる。

「ソノツギ」は同じ店舗を共有するが、曜日ごとに店の名前も雰囲気、メニューも変わる仕組みになっている。現在 6 つの主婦らによる市民グループと、4 つの学生グループが週毎に、あるいは各週でカフェを運営している。各曜日すべて出店者がいるため、休業しない限り一週間を通して営業している状況である。

(2)一人ひとりの「食べること」と「生きること」を大切に「ヘルシーカフェのら」（埼玉県さいたま市）

経営者は「ベジタブル& フルーツマイスター」の資格を持ち、カフェでは、安全安心な食材を使った料理が食べられる。子育て中のママからご近所のお年寄りの人まで様々な世代の人が集い、おいしい料理を食べながらの話はとまらない。ランチは和定食か洋定食を選ぶことができ、レンズ豆や赤米を使った料理が味わえる。

写真２　ヘルシーカフェのら

（出展　ヘルシーカフェのらHP）

「広場」は店の奥にあり、約 16 畳のフロアは子どもたちが寝転がれるように板張りで、光の差し込む明るい空間である。赤ちゃん連れのお母さんに優しい、気軽に集まれる場所をという思いで「広場」を創った。子育てや女性の生き方がテーマのワークショップだけでなく、蜜蝋キャンドルワークショップなど様々なセミナーが開かれている。安全安心の野菜がある幸せ、おいしいごはんのある幸せ、一歩前へ進みつながる幸せ、この３つの幸せがつながり、「のら」

は来る人を 3 倍の幸せで温かく包んでいる。

(3)高齢者の「元気」を満タンに「元気スタンド・ぷリズム」（埼玉県幸手市）

鉄筋コンクリート 5 階建（3,028 世帯）の幸手団地が誕生して 37 年。今や高齢単身世帯が 469 世帯となった。そこに住民交流の場、居場所が必要と感じ、その商店街の一角に「元気スタンド・ぷリズム」がオープンした。

スーパーに勤めていた頃、お年寄りに声をかけられ、悩みに答えていた小泉さん。高齢者にいつまでも元気でいてほしいという理想実現のためスーパーを退職、以後、夢実現のため、まっしぐらに走りだした。介護を必要としないで楽しく元気にすごせるようにしたい、それが「ぷリズム」のモットーである。そのために 7 項目にわたって何を手助けしたいのか掲げた。①食事からの元気、②生活からの元気、③運動による元気、④趣味活動での元気、⑤経済的な元気、⑥労働による元気、⑦人間関係での元気である。そのために最新の情報をキャッチして、具体的な支援を提示した。たとえば、「生活からの元気」では、昭和名曲ＢＧＭを流したり大人向けドリルを紹介したりして脳活性化訓練をはかったり、足をぬらさず入れる石の足湯を設置したりしている。

写真３　元気スタンド・ぷリズム

（出典　元気スタンド・ぷリズムHP）

(4)共に明るく、元気のあるまちづくりを考える「白石まちづくりハウス」（北海道札幌市）

（先駆的地域づくり現地調査　平成 26 年 11 月 15 日　視察訪問）

札幌市白石区にあるコミュニティカフェ「白石まちづくりハウス」（以下「ハウス」という。）を訪問。最初から出迎えが温かい。

ハウスは、2003 年 6 月にオープンから 10 年以上続いている。きっかけは JR 白石駅によって南北に分断された地域、駅を中心とした交流の必要性から町内会、商店街、障がい者の福祉施設、それぞれの立場の人たちが立場を超えて新しい出会いと活動を求める声から誕生した。

写真4　白石まちづくりハウス

活動の基本は規制なく緩やかなつながりで自由なことだ。視察中でもお母さんとお子さん、北海道大学大学院の学生がハウスを訪れていた。地域の茶の間、囲碁・マージャン、英語教室（小学生対象）など活動が多彩で子どもから高齢者、障害者と利用者の層が厚い。

何より驚いたのは定年を迎え、妻に先立たれた一人暮らしの男性もハウスを訪れ、居場所を大事にしていることだ。コミュニティカフェは、孤独からの緩いつながる場所になっていると感じた。長く活動が続けていけるのは、一人ひとり、そしてみんなが幸せに暮らす地域を目指す理念とボランティアスタッフの温かさがハウスの源泉になっている。

(5)地域のサロンとして「小豆島ひとやま 寺カフェ」（香川県小豆島）

名古屋市から家族とともに移住した三村さんは、小豆島で暮らしていると、白衣（びゃくえ）を着て杖をついて歩いているお遍路さんをよく見かけた。

お寺というと、綺麗に手入れされたお庭を観光として見に行くとかその程度で、普段の生活ではほぼ関わることのない場所だった。それが一転、ここ肥土山では毎日家からお寺が見え、鐘の音が聞こえ、お遍路さんも見かける。

写真5　小豆島ひとやま　寺カフェ

（出典　小豆島ひとやま　寺カフェHP）

急に近い存在になったことから、そして偶然にも、現在の多聞寺のご住職は同年代、さらに子ども同士も同年代。お寺と檀家としての関わり、同年代の子どもを持つ親同士の関わり、自然と会う機会が増えていき、いろんな話をしていく中で、今回の「小豆島ひとやま 寺カフェ」の企画が生まれた。

住職の妻の藤本さんは、小豆島で育ち、東京で学生時代を過ごし、再び小豆島に帰ってきた女性で、お寺でことわざ、俳句教室を開き、オリーブの木の念珠ブレスレットづくりのワークショップをしたり、お寺でヨガをしたり、いろいろな「寺活」をしている。そんな彼女からの「寺カフェやってみない」のひとことで始まった。

お寺でカフェを開くことで、お寺をもっと身近に感じてほしい、気軽に足を運んでほしい、そしてそういう風景のある小豆島肥土山という集落をいいなと感じてほしいという思いからオープンした。

５．カフェは居心地のよい「たまり場」、過去も未来も新しい公共の場

(1)居心地のよいたまり場

前章で、コミュニティカフェの先駆的な事例を取り上げた。では、なぜ、運営は大変であっても広がりをみせるのか。それは、やはり、だれもが訪れたくなる居心地のよい「たまり場」になっているからだ。

居心地のよいたまり場とは、会社や家族という「必然的コミュニティ」ではなく、同じ趣味や目的を持つ人が集まる「偶然的コミュニティ」、それが「たまり場」である。

東京杉並区で都市型茶室「６次元」を経営するナカムラクニオ氏によると、「人が集まる場所に、人は集まる」、「夢が見られる場所に、人は集まる」、「良いものがある場所に、人は集まる」、「安心快適な場所に、人が集まる」、「自分のためになる場所に、人が集まる」、「自分を認めてくれる場所に、人が集まる」と言う。（ナカムラクニオ（2013）『人が集まる「つなぎ場」のつくり方』（株）阪急コミュニケーションズ　P67）

(2)カフェは過去も未来も新しい公共の場

カフェができる前の日本のたまり場は、旧石器時代は洞窟や池のほとり、縄文から弥生時代にかけては、竪穴式住居、奈良時代は寺、神社、江戸時代に入ると各街道にある茶屋、湯屋、芝居小屋などがあり、人々の楽しみや憩の場であった。

日本で最初のカフェと言われるのは、文明開化により、1888（明治 21）年、上野広小路に開業した「可否茶館」が最初であると言われている。

洋館２階建て、新聞や雑誌の閲覧が自由に出来て、ビリヤード場、トランプ、囲碁、将棋などゲームが揃い、図書館やクリケット場もある。飲み物は珈琲が中心でアルコールもあった。

明治末になると、次々カフェが開業。有名なところでは、東京銀座で開業した「カフェー・パウリスタ」。芥川龍之介や平塚らいてうなどの文化人のほか一般の学生や社会人などが出入りする庶民的な店舗として人気を博し、「誰もが気軽に親しむことが出来る喫茶店の元祖」とされた。

戦後は、1955（昭和 30）年ころから喫茶店が復活。個人経営の店が主流となり、店主のこだわりが店の個性として色濃く反映された喫茶店が人気を獲得した。特に「音楽系喫茶」と呼ばれる喫茶店は、美輪明宏や金子由香利などを輩出した「銀巴里」に代表されるシャンソン喫茶、「ACB」「メグ」「灯」のようなジャズやロックの音楽演奏がサービスの主となったジャズ喫茶、歌声喫茶、ロック喫茶、後年のディスコやクラブなどに多大な影響を与えたロカビリー喫茶、ゴーゴー喫茶など多数の業態の店が誕生している。

1980 年代には、全国で喫茶店数は、10 万件を超えたが 1990 年代に入ると飽和状態となり、レストランとの競合や地価、人件費の高騰で喫茶店全盛期の約半分まで減少する。

その後、ドトールなどチェーン系カフェの流れも戦国時代を迎え、「スターバックス」「タリーズ」を始めシアトル系本格珈琲が進出し、現在は、さらに進化して複合化カフェが乱立。家カフェ、動物カフェ、メイドカフェ、ブックカフェなどが増え続けている。

いつの時代でも、多様な「たまり場」があり、自分で自分のいられる場所が求められていると考えられる。

ドイツの都市社会学者クレーマー・バドーニ教授が、飲み屋はきわめて生き生きとした場だ。飲み屋は友人にとっても他人にとっても出会いの場である。飲み屋では、政治が議論され、延々と雑談が交わされ、飲み、笑い、遊び、食う、飲み屋は、カフェやダンスホールや、さらには裁判所やマスコミなどと同様、基本的には公共の場であると述べている。（Thomas Krämer-Badoni & Franz Dröge, Die Kneipe,(1938)）

つまり、飲み屋、カフェは法的には誰でも入場でき、誰も人種や宗教や性別によって入場を拒絶されることはない新しい「つながる場所」であり、公共の場と言える。

６．桐生市におけるコミュニティカフェ創生の取組

(1)桐生市の現状と社会資源

本市はかつて織物を中心とした中小零細企業が隆盛を極めたが、時代の趨勢により基幹産業の衰退とともに少子高齢化により空き家の増加、商店街の空洞化、無縁社会が象徴するように高齢者等の孤独死など地域の活力は失いかけているのが現状である。

桐生市の高齢化率は、平成 26 年 4 月 1 日現在、31.41%となっており、3 人に一人が高齢者。若年層の東京都市圏等に流出が続き、人口減少が加速している一方、高齢者を中心に単独世帯が増加の一途である。

しかし、市街地には渡良瀬川と桐生川が流れ、山々が屏風状に連なり、水と緑に恵まれた地に歴史と伝統が息づいている。

桐生の歴史は古く、桐生新町重伝建地区は、近代の桐生を代表する産業である絹織物業を中心に発展した町の形態として、江戸後期から昭和初期に建てられた主屋や土蔵、ノコギリ屋根の工場など、絹織物業に係わる様々な建造物が一体となり、製織町として特色ある歴史的な環境を今日に伝えている。 また、絹織物業を中心に発展した町、桐生を示す象徴的な地区でもある。

今、信頼・責任・積極性をテーマ に、「伝統と創造　粋なまち桐生」を将来都市像として、 都市基盤の整備や群馬大学理工学部を核とした産学官の連携による新産業の創出、さらに豊かな自然などの資源を生かした環境施策を推進し、住みよいまちづくりに努めている。

⑵桐生市のコミュニティカフェ創生の取組

本市の現状や社会資源をとらえる中で、歴史と文化を生かしながら、まちの中に大学がある強み、世代ニーズも意識して多種多様な新しい「居場所」を創出し、この地域の緩いつながりを作り出すコミュニティカフェ創生の取組を考えたい。

① 若年層を中心としたコミュニティカフェの創生

NHK スペシャル取材班によると高齢者だけでなく、若い世代にも無縁社会の恐怖が広がっていると言う。ツイッターでつぶやくことが唯一の救いの場となっている独身女性の例も上げられた。

表３　コミュニテイカフェの種類

種別	既存カフェ型 新設カフェ型	寺カフェ型	福祉カフェ型	アンテナショップ型	大学連携・ 重伝建地区型
内容	若者、学生の情報発信・交流の場とコミニティビジネスなど創生の場として既存の喫茶店にコミュニテイ・カフェの機能を付加又は新設型カフェを運営	高齢者や地域の人の居場所づくり・交流の場として寺でのコミニュテイカフェを運営	高齢者（介護予防等）、子ども、障がい者の居場所づくり・情報交換の場としてコミニュテイ・カフェの運営	商業の活性化・食文化・ものづくりの場の情報発信の場としてコミュニテイ・カフェの運営	学生とまちの人との交流の場、学生から発信される地域づくりのアイデアの創生の場としてのコミュニテイ・カフェの運営
場所	カフェ・喫茶店	寺院	福祉センター 福祉施設	駅前空き店舗 中心市街地商業店舗	群馬大学施設 重伝建地区の 古民家
形態	常設型 情報発信	不定期型 相談機能	常設型 相談機能	常設型 情報発信 イベント	不定期型 情報発信 イベント
支援	市単独補助	自治会補助	・介護保険 地域支援事業 補助 ・障がい福祉補助	・空き店舗活用補助	・産学官連携補助

若年層の孤独を解消し情報の発信と交流の場として既存のカフェや空き屋等を活用し、コミュニティ・ビジネスなども創出されるコミュニティカフェを開設する。本市は産学官連携によるインキュベーション施設があり、常駐するインキュベーションマネジャーの相談支援も可能である。

また、東京都杉並区にある読書好きが集まるカフェ「６次元」では、年 5、6 回「村上春樹読書会」を開き、20～40 代の男女約 15 人が集まり、ノーベル文学賞の吉報を待つ取組なども例もあり、カフェが新しいつながりと出会いの場となることが期待できる。

② 高齢者や地域の居場所となる寺カフェの創生

無縁社会から孤独死への不安、孤立による寂しさなど社会と分断された人の新たな「居場所」となる寺でのコミュニティカフェを創生する。

NHK スペシャルの中で引き取り手のない遺骨を無償で共同墓地へ埋葬するお寺の取組が取材されていた。お寺は人々の最後の砦であり、居場所となる。

また、仏教の教えは人々の心を癒し、救うことがある。市内には数多くのお寺があり、寺は重要な空間である。

③ 福祉型カフェの創生

近年、子ども（母親）、障がい者（発達障害）、高齢者が孤立して虐待などの社会問題となる例が数多く寄せられる。その要因に一つは、問題を家族だけで抱え、相談する人も周りにいないために様々な事件が起きる。

先の先進事例の埼玉県幸手市の「元気スタンド・ぷリズム」でも、ひとり暮らしの高齢者が「人と話すことが、楽しい」など新たなつながりにより孤独でなくなった例など、同じ不安や悩みを持つ者同士が新たにつながる「居場所」として、福祉型のコミュニティカフェを創生する。

④ アンテナショップ型コミュニティカフェの創生

街の空洞化は、商店街が空き店舗が増え、人々が集まる場所ないことである。集まる場所がないから人々も孤立する。地元の特産品や食文化などは地域で共有できる最大の社会資源である。新たなものづくりを創出する取組から新たなつながりが生まれ、地産地消による特産品等の情報を発信するアンテナショップとしてのコミュニティカフェを創生する。

⑤ 大学連携・重伝建地区型コミュニティカフェの創生

本市には、群馬大学理工学部があり、産学官連携を盛んである。また、大学に近くに重要伝統的建造物群保存地区があり、観光のスポットとなっている。

学生とまちの人との交流を通じて、新たな地域づくりのアイデアの創生の場としてのコミュニティカフェを創生する。

宇都宮大学連携によるコミュニティカフェ「ソノツギ」は、地域の人と人のつながりを紡ぎなおし、まちを育て、市民を育てる場づくりや東京都高島平団地学生入居プロジェクトの多世代共生・多文化共生コミュニティカフェグリーンの取組の例など若い力は地域のエネルギーとなり、学生との交流は新たな人間関係を生み出し孤立感がない地域社会となることが期待される。

７．コミュニティカフェの財政支援について

(1)市単独補助金の創設（既存カフェ型・新設カフェ型）

コミュニティカフェの調査では、７割が自主運営型であるが、赤字が続き運営が厳しいのが現実である。自主運営を尊重しつつ、行政として支援をして居場所を地域に多く広げていくことがまずの優先課題と考える。

そのためには、コミュニティカフェが地域活動のための知識やノウハウを学ぶ場になり、地域の自律に向けた取組みを始める場となるよう、市民活動団体、NPO、企業等が実施するコミュニティカフェの開設や事業運営に関する取組に対して、当該事業費を補助することが必要となる。

補助対象事業は、コミュニティビジネス・ソーシャルビジネス等に関する情報発信・情報交換、実例の紹介、イベント等の自立的な地域活動をめざした取組を対象とする。

また、新たな地域の人の居場所づくりの確保と地域活動を創出することを目的とした事業の支援とする。

補助金の額は、事業者に対して交付する補助金の額は、１事業者当たり 50 万円を上限とし､補助対象経費の２分の１以内の額の当該年度の予算の範囲内において市長が決定する。

補助金の財源については、千葉県市川市の個人市民税の１％を団体に支援する制度の例に学び１％の団体への支援額は個人市民税納税者等が支援したい団体を選び、配分する方式により財源を確保するなどの仕組みづくりも必要である。

また、視察先の「白石まちづくりハウス」でも家賃が支出の大半を占めていることから、限られた財源の中で運営するためには和歌山市が取組んでいる「善意ある地権者から土地を安い家賃で借り、その土地から儲けが出た場合には家賃として一部をお支払いする」という収益連動家賃制度を導入するなど地権者との交渉も検討する。

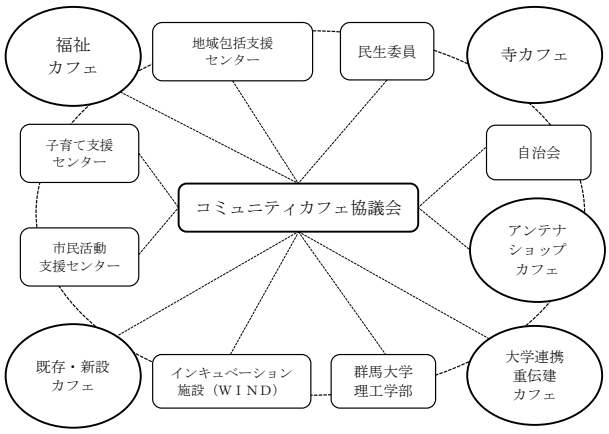
８．コミュニティカフェのマネジメント支援について

(1)コミュニティカフェの在り方

コミュニティカフェのもっとも重要なことは、そこで提供される飲み物、食材が満足するものであることである。珈琲がおいしい、ランチがおいしいなど成功しているコミュニティカフェは必ず飲み物、食材にコンセプトとこだわりがあり、リピーター率が高い。

また、成功事例は情報発信が活発であり、イベントづくりも多種多様で創造性が豊かなものとなっている。コミュニティカフェを成功させるためには、マネジメント支援をして運営を充実させる必要がある。

図２　コミュニティカフェ　ネットワーク



(2)コミュニティカフェのマネジメント支援

コミュニティカフェ協議会を設立し、情報交換、地域づくりの提案、交流イベントの交流の場と情報共有の場の拠点とする。

市内で居場所づくり・コミュニティカフェの運営等を行っている（予定も含む）個人・団体等の連携・ネットワーク化を図ることで、各地域での居場所の充実や支えあいの体制整備に必要な情報等を収集・発信していく。 特に市内のコミュニティカフェの現状を把握し、その立ち上げ、運営、継続、発展のサポートを行っていく。また、地域に適切な情報提供を行い、市全域にコミュニティカフェ・居場所づくりの輪が広がり充実していくための基盤づくりを目的とする。

９．おわりに

桐生市におけるコミニュティカフェ創生の取組について考えてきた。NHK 取材班による

無縁社会の実態は都会だけの話ではなく、むしろ少子高齢化が加速的に進む地方都市の方が人々の孤立する可能性が高い。地方都市には今後、様々な取組むべき課題があり、コミュニティカフェですべて解決するわけではないことは至極当然の話である。しかしながら人が緩いつながりを求め、その居場所から新しい出会いや取組を生む小さなことから、地域づくりの種がまかれることが大切である。

また、筆者が今回のテーマを取り上げた背景は、コミニュティカフェを設立することが目的ではない。人と人が心からつながりを持たなければ、地域づくりは始まらないという問題意識からつながる場所が必要だと感じたからだ。

ひとつひとつは、とても小さな取組でも地域ごとに、新しい「つながる場所」の存在が、ネットワークで結ばれることで、新たな「地域力」となって無縁社会を乗り越える力を生んでいくことを切に願いながら、本稿を終わりにしたい。

【参考文献・資料】

・井上 温子（発行年不明）「多世代共住・多文化共生　みらいネット高島平の成果」Machinami Vol.47
・NHK スペシャル取材班[編書]（2013）『無縁社会』文春文庫
・大分大学福祉科学研究センター(2011)「コミュニティカフェの実態に関する調査結果[概要版]」
・大城五月「コミュニティ・カフェによる街づくり」HP
http://gyosei.mine.utsunomiya-u.ac.jp/since2001koki/yoka09/090701oshiros.rtf.htm（2014 年 9 月 30 日アクセス）
・栗原孝（2007）「グローバル化のもとでの日本家族の変容」「現代社会における家族の変容：東アジアを中心に（Ⅲ）」（亜細亜大学アジア研究シリーズ No.62）
・国立社会保障・人口問題研究所（2014）『日本の世帯数の将来推計（全国推計）2013（平成 25 年）1 月推計』
・坂井昭夫（2012）「無縁社会考― 経済学の責務と若干の論点―」高崎経済大学論集第 54 巻第4号　13～27 頁
・陣内 雄次、田村 大作、 荻野 夏子 (2007)『コミュニティ・カフェと市民育ち―あなたにもできる地域の縁側づくり』萌文社
・特定非営利法人　越谷 NPO センター(2010)「埼玉コミュニティカフェ・ガイドブック」
・Thomas Krämer-Badoni & Franz Dröge, Die Kneipe,(1938)
・ナカムラクニオ（2013）『人が集まる「つなぎ場」のつくり方』（株）阪急コミュニケーションズ
・名和田是彦（2011『新しい「公共の場を再建する試み」－コミニュティカフェで地域の輪を広げる』月刊地域づくり 12 月号
・ニッセイ基礎研究所（2012）「孤独死リスクと向き合う」ジェトロジャーナル
・三重県地方自治研究センター(2013)「地方自治みえ」（補助金なしでコミニュティカフェ経営はできるか？）
・ウィキペディア「日本における喫茶店の歴史」 http://ja.wikipedia.org/wiki/（2014 年 8 月 4 日アクセス）
・小 豆 島 ひとやま　寺 カフェ、地 域 のサロン HPhttp://colocal.jp/topics/lifestyle/shodoshima/20130429_17400.html（2014 年 8 月 4 日アクセス）
・コミュニティカフェについて－都道府県別設置数とカテゴリー別設置数(認定特定非営利活動法人 まちぽっと)HP
http://machi-pot.org/modules/topics/index.php?page=article&storyid=51（2014 年 11 月 23 日アクセス）
・千葉県市川市（1％支援制度）HP　http://www.city.ichikawa.lg.jp/anniversary.html（2014 年 11 月 23 日アクセス）